

大学生とその両親の死の不安と死観¹⁾

金 児 暁 嗣

問 題

今、われわれはある意味で科学の発達の極点を経験しようとしている。とりわけ高度医療技術の発展は、高齢化社会、癌告知の是非、末期医療、延命医療、安楽死、さらには脳死・臓器移植など、人間の生死に関わるさまざまな問題を生み出している。そのことによって、人間がこの社会のなかで生きるとはどういうことか、死とは何かという問題、いわば死生観があらためて問われているとあってよいだろう。極点といったのは、科学の発達によって科学では答えることのできない問題が派生しつつある、という逆説的な意味においてのことであり、それは人類がはじめて経験するところのものである。死のポルノグラフィならぬ“死のグラフィティ”（金児和子、1994）とでもいえる昨今の氾濫・流行の背景には、死に対する現代人の精神的無防備があり、それが現代人の直面せざるを得ない深刻な課題を突きつけている。本稿の目指すところは、このような状況に鑑みて計画された科学的研究である。

死に関連した情動反応や死への態度は、他の諸態度や価値観と同様に、人間が成長し生活してきた社会や文化のなかで形成されるものである。そうした社会的場面を代表するものとして家族があげられる。金児（1991a）は、世俗化社会の現代にあっても、宗教的態度が親から子どもへ伝えられていることを明らかにした。以下ではこの研究の流れに沿って、死に対する態度を取り上げ、親子の類似性と死への態度の規定要因としての宗教行動について検討を加えたい。分析1では情動反応としての死の不安、分析2では死に対

1) 本研究は、文部省科学研究費補助金（一般研究C、課題番号05610031）の補助を受けた。

する総体的態度構造としての死観 (death perspectives) が問題とされ、その多次元的把握を試みる。次いで、親の死の不安や死観が子どもに及ぼす影響について論じる。

死への態度の心理学的研究は、自己評定形式による死の恐怖 (fear) や不安 (anxiety) に関するものから始まり、現在でもそれが主流を占めている。Lester (1967) がこの種の諸研究を論評した時点では、精神測定論的に標準に達しているものはなかったが、その後表面的妥当性を備えた尺度が見られるようになった。なかでもよく知られているものに Templer (1970) による「死の不安尺度」(Death Anxiety Scale, 一般に DAS と略称されている) がある。この尺度は15個の項目から構成されており (表1参照)、諾否法による回答が求められる。Templer たちのグループは、広範囲の母集団のデータを収集して、最近では DAS を臨床場面 (死への準備教育など) にも適用している (Lonetto & Templer, 1986)。

DAS と類似した尺度はこの他にもいくつかあるが (例えば, Boyar, 1964; Lester, 1966), 総じて死の不安とその関連変数を明らかにしようとしてきたこの種の研究には、いくつかの点で物足りなさがある。

まず、行動的側面との結びつきが明らかにされていないことである (Kastenbaum, 1986)。DAS の得点のちがいによって、特定の行動をとる傾向をもし指摘できるなら、DAS の妥当性を高めることになろう。ここでは、宗教行動を取り上げ、DAS との関連性を検討する。宗教の大きな機能に死の怖れ²⁾からの解放があることはよく知られている。しかし、ことはそれほど単純ではなく、信仰の持ち方によって死の怖れが強められたり弱められたりする。Meadow と Kahoe (1984) は、内発的な宗教志向性 (intrinsic religious orientation) — 外発的な宗教志向性 (extrinsic religious orientation) と死の不安とを関連づけた研究を総括して、外発的動機が強いときに死の怖れが強く、内発的動機づけが強いときに死の怖れが弱いと結論している。日本人の宗教行動を、自己修養的行動、慰霊的行動、現世利益的行動の3つに大別した場合、自己修養的行動は内発的な宗教志向性、現世利益的行動は外発的な宗教志向性に相当し、慰霊的行動はその中間にあって、両志向性を媒介する役割をもっていると考えることができる。なぜなら、慰霊とい

2) 一般に、特定の対象に対する怖れを恐怖 (fear)、はっきりした対象のない漠然とした怖れを不安 (anxiety) として区別しているが、死の怖れはその両方を含むのが普通である。本稿では、恐怖と不安を区別しない場合には、「怖れ」という語を用いることにする。

う行動は加護^{オカゲ}と靈魂^{タタリ}の両観念を含み、オカゲ意識は内発的宗教、タタリ意識は外発的宗教へと導くからである (Kaneko, 1990)。それゆえ、自己修養的な宗教行動は結果として低い死の不安、現世利益的な宗教行動は強い死の不安との結びつきが予想される (Kaneko, 1990; 金児, 1994)。この予測の根拠は次のとおりである。

金児 (1991b) と金児和子 (1990) は、向宗教性、加護観念、靈魂観念の3つの宗教性と死の怖れとの関係を検討しているが、死の不安と有意な相関関係にあったのは靈魂観念——現世利益的行動と密接に関連している——だけで (プラスの相関)、向宗教性——自己修養的行動と密接に関連している——と死の不安との間にはなんら関連性を見いだすことができなかった。しかし、宗教的志向性としての内発性—外発性は、とくに強い信仰をもっているわけではない一般の人びと、それも大学生とその両親 (青年と中年) という母集団からサンプリングした場合、宗教的態度や観念よりも行動的側面においてそれがより強力に反映されるものと思われるのである。

DASの最大の欠陥として、死に対する不安は死を取り巻く信念体系の一部にすぎず、それだけでは全体的な死の態度構造が把握できないということがある。われわれが死に対して怖れを抱いたり、死の恐怖から解放されたりするのは、死がいろいろな意味をもつからである。たとえば、未知なるものであるがゆえの恐怖と不安がある。あるいは、肉体的苦痛への恐怖がある。死後の自分はどうなるのか、遺族はどうなるのか、といった精神的苦痛もある。あるいは、やり残した仕事に対する心残りがある。一方、死後の理想世界を描くことによって、死の怖れが和らぐ場合もある。あるいは、人生の総決算の機会として、死に積極的意味を見いだそうとすることもある。その典型を『葉隠』の思想に見ることができる。

死の問題に対してわれわれがなすこうしたさまざまな意味づけを死観と呼んで、その心理学的研究に先鞭をつけたのはSpilkaたちのグループである。彼らは、死に対する態度についてMurphy (1959) がなした考察を敷衍して、最終的に8つの死観尺度を構成した (Hooper & Spilka, 1970; Minton & Spilka, 1976; Spilka, Stout, Minton, & Sizemore, 1977)。それらは、「苦しみと孤独」、「浄福な来世」、「無関心」、「未知」、「家族との別離」、「勇気」、「挫折」、「自然な終焉」の8つである。「浄福な来世」と「勇気」は肯定的 (少なくとも否定的でない) 死観、他の6つは否定的死観といえる。そして、肯定的死観はAllport (1966) のいう内発的宗教と結びついているのに対し

て、否定的死観は外発的宗教と関連していることを彼らは明らかにした。こうした研究の流れは、宗教性を多次元的なものとする見方と同様に、死に対する態度も多次元的なものとして把握しようとする方向にあることを示している。

上記の問題に絡んだ DAS のもうひとつの弱点に、尺度上の低得点者の説明が困難なことが挙げられる (Kastenbaum & Costa, 1977)。つまり、低得点者は本当に死の不安が低いのか、それとも死を極度に拒絶したり無関心であるために得点が低いのか、それが定かでないのである。しかし、死への態度を多次元的に捉えることによって、低得点者の説明が可能となろう。

方 法

調査対象者

大阪市立大学の教養課程の学生312名 (男子228名, 平均年齢19.3歳, 標準偏差1.35歳; 女子82名, 平均年齢18.6歳, 標準偏差0.76歳; 性別不明2名) とその両親395名 (父親193名, 平均年齢51.2歳, 標準偏差4.25歳; 母親202名, 平均年齢47.9歳, 標準偏差3.76歳; その他12名)。ただし, 完全回答のないサンプルがあるので, 以下の分析によってはサンプル数に変動がある。

質問票と調査の実施方法

Templer (1970) の DAS, 死観尺度 (Spilkaら, 1977), 宗教観尺度 (金児, 1978, 1982, 1986; Kaneko, 1990), PIL尺度 (Crumbaugh & Maholick, 1964), 価値観尺度 (金児, 1985), 日頃の宗教行動 (金児, 1986), LOC 尺度 (鎌原・樋口・清水, 1982), F 尺度 (藤沢・浜田, 1961) など, 多数の項目について質問した。ここでは DAS, 日頃の宗教行動 (表 2 参照), 死観尺度 (表 4 参照) に表われた結果に限定して報告する。

DAS と死観尺度を日本語に翻訳し, DAS は 4 件法 (1 = まったく反対, 4 = まったく賛成), 死観尺度は 6 件法 (1 = まったく反対, 6 = まったく賛成) による回答を求めた。DAS について, 諾否法による評定形式を採用せず, リッカートタイプの応答を求めたのは, この方が個体差を検出できるからである (McMordie, 1979)。

大学生には 1986 年 7 月, 3 クラスの一般教養の心理学の受講生を対象に, 講義時間に集合調査を行った。両親に対しては, 1987 年 3 月に郵送調査を実施した (回収率 65%)。

分析1 親子の死の不安と宗教行動

目的

内的整合性のある DAS を構成し、大学生とその両親の DAS の得点を比較する。次いで、DAS と宗教行動との関連性を検討する。

分析方法

まず、DAS が 1 次元構造であるかどうかを確かめるために、大学生群と両親群とを込みにして、15 項目の項目間相関係数（ピアソンの積率相関）を算出し、この相関行列の対角成分に、各変量と残りの変量との重相関係数の平方（SMC）を代入して、固有値 1.0 以上および固有値が大きく下がる手前の因子まで、という 2 つの基準のもとに、共通性の反復推定の主因子法による因子分析を施した。この結果に基づいて、1 次元性を高めるために因子負荷量や共通性の低い項目を除外して項目分析を行い、再度主因子法による因子分析を行った。

結果

1) DAS の尺度構成

15 項目の因子分析の結果、固有値は $\lambda_1 = 3.21$, $\lambda_2 = 0.81$, $\lambda_3 = 0.60$, $\lambda_4 = 0.29$, $\lambda_5 = 0.24$, …… となり、上記基準により 1 因子と定めた。この結果を表 1 に示した。次に、15 項目のうち負荷量が低い 6 項目を除外して、再度因子分析を行った。この結果も表 1 に示したが、明快な 1 次元性をもった死の不安尺度を構成している。不安が高いほど高得点となるように、マイナスの負荷量をもった項目の評定値を変換して、9 項目の得点を加算した値を項目数で割った値を死の不安得点とした。クロンバックの信頼性係数は $\alpha = 0.79$ となり、内的整合性のある尺度が構成された。なお、この信頼性係数は 15 項目すべてを使用した場合 ($\alpha = 0.77$) よりもやや高くなっている。

2) DAS の親子の比較

図 1 に親子の得点を示した。尺度の中位点（賛成でも反対でもない位置）が 2.5 であるので、4 群すべてが死に対して不安を抱いているといえる。性別と親子を要因とした分散分析の結果、性別 ($F = 4.56$, $df = 1/698$, $p < .05$), 親子 ($F = 19.76$, $df = 1/698$, $p < .0001$) において有意差が認められた。男性よりも女性、親よりも子どもの方が死の不安が強く、多重比較 (Tukey 法) の結果、父親は他の 3 群すべてとの間の差が 5% 水準で有意となった。家族構成員の中で、父親の死の不安が相対的に低いことが明らかとなった。

表1 DAS項目の因子分析の結果 (N=711)

項 目	全 項 目		項目分析後		平均値 ^a	標準偏差
	因子 I	共通性	因子 I	共通性		
1. 死ぬのがとてもこわい (T) ^b	.710	.504	.737	.544	3.07	.851
2. 死についての考えはめったに心に浮かんでこない (F)	-.291	.084	—	—	2.45	.930
3. 人が死について話していてもとくに気にならない (F)	-.511	.261	-.468	.219	2.47	.842
4. 手術を受けなければならないと考えることはこわい (T)	.469	.219	.460	.212	3.02	.903
5. 死ぬことは全然こわくない (F)	-.702	.492	-.751	.564	1.87	.871
6. ガンになることはあまりこわくない (F)	-.446	.199	-.378	.143	2.18	.871
7. 死についての考えに悩まされることはまったくくない (F)	-.689	.475	-.701	.492	2.10	.843
8. 時間があまりに速くたつので悲しいと思うことがよくある (T)	.280	.078	—	—	2.92	.781
9. 苦痛の多い死に方をするのがこわい (T)	.469	.220	.470	.221	3.44	.681
10. 死後の生に関する問題がわたしを迷わせる (T)	.461	.213	.453	.205	2.41	.982
11. 心臓発作を起こさないかととても心配である (T)	.283	.080	—	—	1.86	.865
12. 私はしばしば人生はあまりにも短いと思う (T)	.269	.072	—	—	2.72	.838
13. 人々が第三次世界大戦について話しているのを聞くと、ぞっとする (T)	.356	.127	—	—	2.73	.927
14. 死体を見ることはおそろしい (T)	.423	.179	.444	.197	3.24	.805
15. 私にとって将来恐れることは何もないと感じている (F)	.083	.007	—	—	2.29	.706
因子 寄 与	3.210		2.797			

^a 4件法 (1 = まったく反対, 4 = まったく賛成)

^b () 内の記号は, Templer (1970) の諾否法による採点の場合の諾 (T) と否 (F) を表わす。

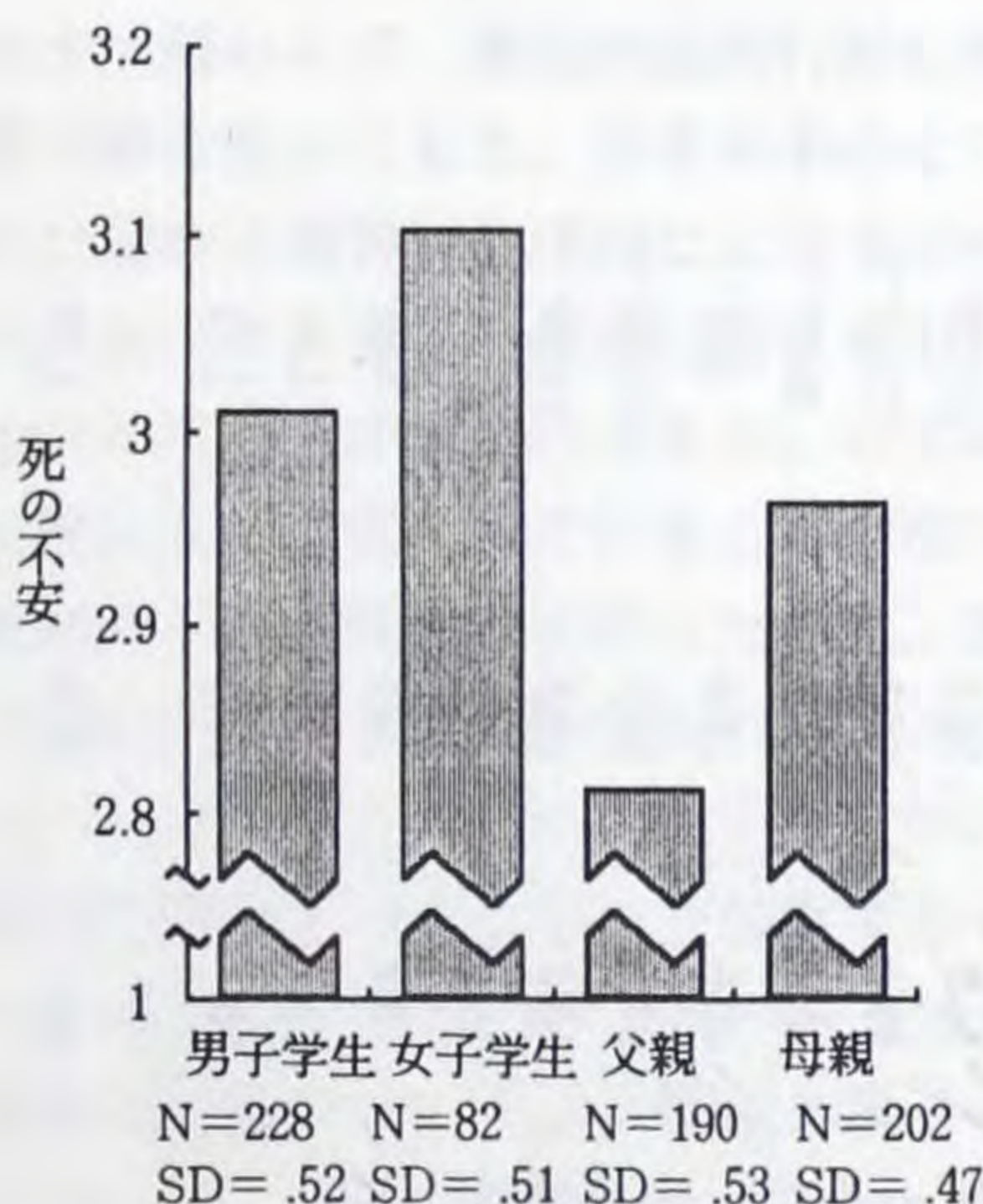


図1 親子の死の不安

3) DASと宗教行動との関連性

日頃従事している宗教行動に関する回答結果を表2に示した。必ずしも子世代よりも親世代の方が宗教行動に熱心であるわけではなく、子どもの方に多く見られる行動もある。15種類の行動を分類するために、最長距離法によるクラスター分析を施したところ、3つのクラスターが得られた。それらは#7~#11と#14の6項目、#1と#3~#5の4項目、そして#2、#6、#12、#13、#15の5項目でまとまりを示した。それぞれのクラスターは、先に述べたように自己修養的行動、慰霊的行動、現世利益的行動とみなすことができる。表2を見ると、親子をつうじて、自己修養的行動はあまりとられておらず、慰霊的行動と現世利益的行動が盛んである。

親子のちがいをより詳しく検討するために、それぞれの行動がとられている場合を1と得点化して、3つのクラスターについて合計得点を求めた。この結果を図2に示した。3種の宗教行動を測定する項目数にちがいがあ、またそれぞれの行動に対する重みづけにもちがいがあ。たとえば、自己修養的行動をとる人は少ないがゆえに、この行動に従事する人はたとえ頻度が少なくても、他の大勢の人よりも自己修養的志向性が評価されるべきである。そこで、平均値を0、標準偏差を1と標準化して、親子の宗教行動を比較したのが図3である。これによると、子世代は親世代に比べて、自己修養的行

表2 大学生とその両親の日頃の宗教行動

#	宗教行動	男子学生 (N=228)	女子学生 (N=82)	父親 (N=193)	母親 (N=202)	親子の比率検定 ^a χ^2 値 (df=1)
1.	墓参りをしている。	69.3%	73.2%	90.2%	87.6%	38.34***
2.	この1~2年の間に、おみくじを引いたり、易や占いをしてもらったことがある。	59.7	63.4	23.3	34.2	71.66***
3.	祖先や亡くなった肉親の霊をまつる。	38.6	41.5	51.8	55.5	14.28***
4.	仏壇にお花やお仏飯をそなえる。	32.0	37.8	39.4	54.5	13.15***
5.	神棚にお花や水をそなえる。	22.8	28.1	36.8	50.5	29.27***
6.	決まった日に神社やお地蔵さんなどにお参りに行く。	11.0	9.8	17.6	15.8	5.29*
7.	折りにふれ、おつとめをしている。	4.0	4.9	23.3	34.7	72.59***
8.	聖典や教典など、宗教関係の本を折りにふれ読む。	7.5	6.1	13.0	19.8	14.06***
9.	宗教に関する新聞やパンフレットを読む。	4.4	3.7	10.9	17.8	20.35***
10.	信仰グループに参加している。	3.1	3.7	5.2	9.4	5.63*
11.	奉仕グループに参加している。	0.9	2.4	3.1	3.5	2.96
12.	この1~2年の間に身の安全や商売繁盛、安産、入試合格などを祈願しにいったことがある。	73.3	79.3	68.4	72.3	1.73
13.	お守りやお札など縁起ものを自分の身のまわりにおいている。	49.6	65.9	45.1	52.5	1.75
14.	ふだんから礼拝、おつとめ、布教など宗教的な行いをしている。	4.8	4.9	13.0	20.3	24.07***
15.	初詣でに行く	73.3	84.2	74.1	72.3	0.80
16.	宗教とか信仰とかに関係していると思われることは何も行っていない。	1.8	3.7	1.6	2.0	0.20

^a それぞれの宗教行動の有無についての親子間の比率検定

*** $p < .0001$ * $p < .05$

(544)

動と慰霊的行動にはあまり関わらず、現世利益的行動に熱心である。とくに女子の現世利益的行動は群を抜いており、若者を中心とした宗教ブームがもしあるとすれば、それは女性の現世利益志向によるものであることがわかる。一方、親世代は子世代に比べて、現世利益的行動よりも自己修養的行動と慰霊的行動に従事し、とりわけ母親が積極的である。いずれにしても、3種の宗教行動は主として女性によって担われていることが明らかである。粗点を用いて性別と親子を要因とした分散分析を行った結果、自己修養的行動と慰霊的行動において性別に有意差が認められ ($F=17.67, df=1/701, p<.0001$; $F=17.59, df=1/701, p<.0001$), 親子のちがいは自己修養的行動, 慰霊的行動, 現世利益的行動のすべてにおいて有意であった ($F=38.35, df=1/701, p<.0001$; $F=34.86, df=1/701, p<.0001$; $F=16.29, df=1/701, p<.0001$)。また、自己修養的行動については、性別と親子の交互作用が有意であり ($F=3.86, df=1/701, p<.05$), 多重比較 (Tukey 法) の結果、母親は他の3群すべてとの間の差が5%水準で有意となった。これらの結果は、いうまでもなく図3の結果とも符合している。

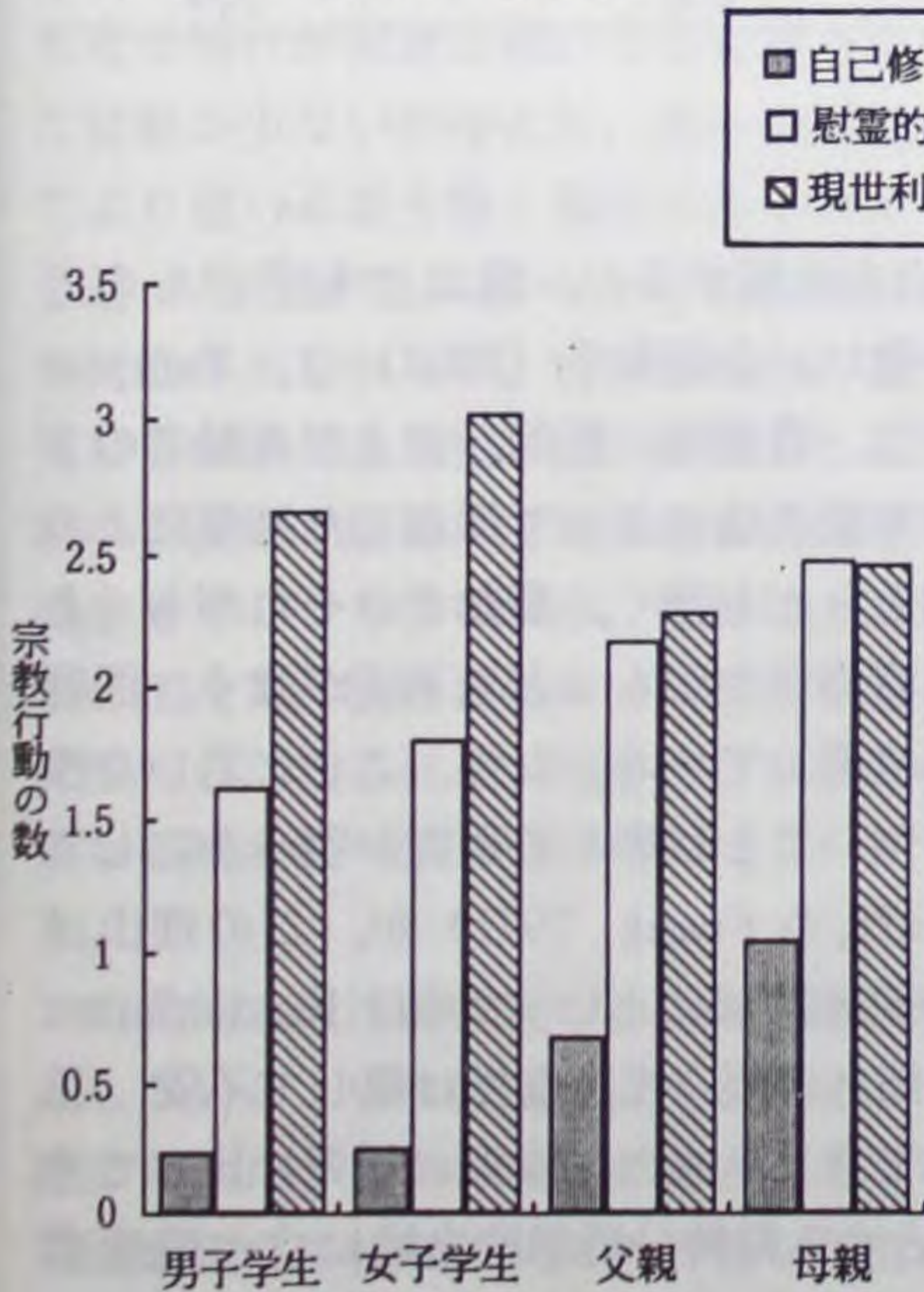


図2 日頃従事している宗教行動

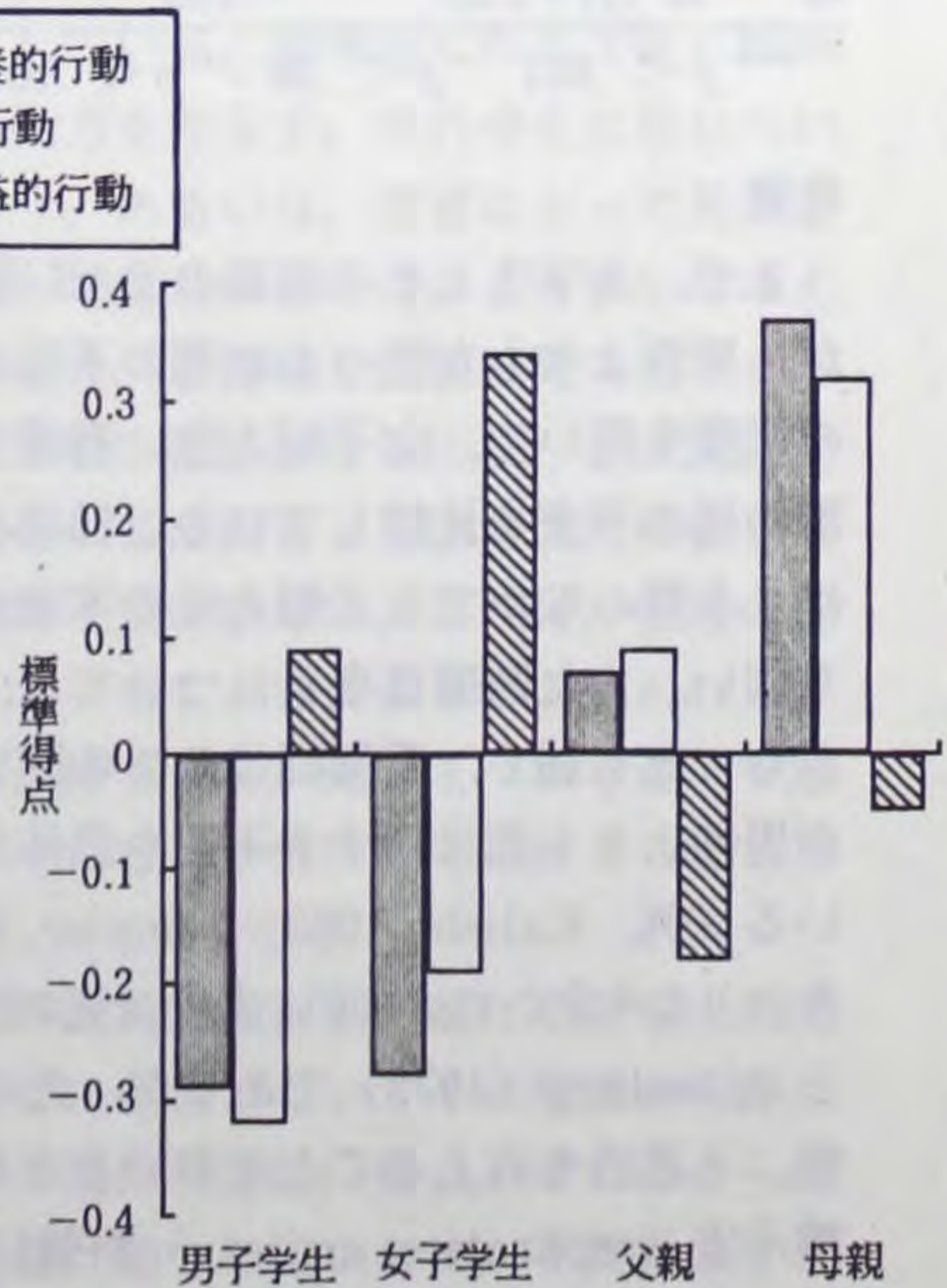


図3 それぞれの宗教行動についての標準得点

宗教行動と DAS 得点との間の関係を見るために、クラスター分析によって類別された 3 種の宗教行動と DAS との相関係数を算出した。表 3 はこの結果である。親子を込みにした全体の結果から、現世利益的行動は死の不安を強める方向に働いているが、自己修養的行動は逆に死の不安を低める傾向にあることがうかがえる。しかし、4 群それぞれ別個に算出した相関係数を見ると、母親においてのみ、自己修養的行動と死の不安との相関が有意である。また、男子学生においては、慰霊的行動と死の不安とはマイナスの相関関係にあるのに対して、女子学生にはそれがプラスの方向に働いている。

表 3 3 種の宗教行動と DAS 得点との相関係数

	DAS 得点との相関係数		
	自己修養的行動	慰霊的行動	現世利益的行動
全 体 (N=716)	-.072 [†]	-.044	.172 ^{***}
男子学生 (N=228)	.005	-.115 [†]	.097
女子学生 (N=82)	.014	.267 [*]	.212 [†]
父 親 (N=190)	.024	-.085	.122 [†]
母 親 (N=202)	-.140 [*]	.053	.239 ^{***}

*** $p < .001$ * $p < .05$ † $p < .10$

考察

まず、大学生とその両親の DAS 得点を比較すると、親よりも子どもの方が、男性よりも女性の方が死の不安が強い。金児和子 (1994) は、Templer の尺度を用いて、女子短大生、看護学生、看護婦、医師、および高齢者の 5 群の死の不安を比較している。15 項目を諾否法によって採点した結果によれば、5 群のなかで女子短大生の不安がもっとも強く、高齢者のそれがもっとも弱い。また医療従事者については、看護学生がもっとも不安が強く、医師がもっとも弱く、看護婦はその中間に位置している。女性、ことに若い女性が男性よりも死に対する不安や恐怖が強いことは多くの研究が明らかにしている (例, Kalish, 1963; Templer, Ruff, & Frank, 1971) が、この理由は今のところ定かではない。女性は死の恐怖を怯える、といったのは Kastenbaum と Aisenberg (1972) であるが、死の怖れに限らず、女性は概して不安、苦痛、不適応を訴えることが多いとされてきた。また、女兒は男児に比べて分離不安 (separation anxiety) が強いとする精神分析学的立場に立つ臨床家などは、死の不安の根源は分離不安にあるとみなしているので、女性の相対的に強い死の不安は当然と考えている (Lonetto & Templer, 1986)。しか

し、また一方では、われわれの社会や文化が、女性が恐怖や不安をあらわにすることを奨励してきたことも事実である。したがって、死の怖れの性差は、つくられた部分も大きいことにも留意すべきであろう（金児, 1991b, p.192）。

死の不安を規定するもうひとつの強力なデモグラフィック要因として、年齢について考察しよう。先の金児和子（1994）や本研究の結果に共通することは、中年層よりも青年層の方が死に対する不安が高いことであった。Lonetto と Templer（1986）や Kastenbaum（1986）は、高齢層を対象とした場合には年齢と死の不安との間には負の相関関係が認められるが、一般に年齢要因は思うほどには強力な変数ではなく、個人のパーソナリティ、生活経験、健康状態などの要因の方が重要だとしている。しかし、死に対する怖れを米国の中年と青年で比較した Kalish と Reynolds（1976）によれば、中年では死が怖いと答えた人は4分の1強であるのに対して、怖くないと回答したのは2分の1であった。一方、青年ではその割合はそれぞれ40%、36%であった。また、同一家族における3世代の女性について比較した Kalish と Johnson（1972）は、娘（平均年齢21歳）は母親（平均年齢46歳）よりも死の怖れが有意に強いことを明らかにしている。若者はこれまで死に触れた経験が少ないがゆえに、死への対処の仕方を知らず、それゆえに死についてより強い不安を抱く傾向にあるのだろう。あるいは、若者にとって死は差し迫った問題ではないけれども、死によって奪われるものがより多いがゆえの反応かもしれない。前者の解釈の妥当性は、看護婦と医師の死に対する不安のちがい（金児和子, 1994）によって、その傍証が得られる。この調査対象の看護婦と医師は平均年齢がほぼ等しく、また両者とも患者の死に接する機会を等しくもちながら、医師の方が死の不安が少ない。これは、性差の要因に加えて、医師は死についてよく知っていることによるものと思われる。死を知れば知るほど、死をみつめればみつめるほど、死にまつわる迷信や迷妄が払拭され、死の怖れが少なくなっていくことは十分に考えられることである。

内発的宗教行動は死の不安の軽減に、外発的宗教行動は逆にその増大に関連しているという仮説は支持された。とくに母親においてその関係が明瞭に認められた。自身の我欲を達成するための現世利益的行動は、それによって我欲が満たされなければあらたな現世利益行動へと向かわせ、不安はますます煽られることになる。一方、自己修養的な宗教行動はそれが内発的に動機づけられており、Allport（1966）の言葉を借りて比喩的にいえば、食物が

消化され吸収されてそれが身体の一部となるように、信仰が内面化されパーソナリティの一部になる。内発的な宗教行動は我欲や不安を鎮めるのである。

慰霊的行動と死の不安との関係が、男子学生と女子学生とではまったく逆であった。男子においては、慰霊的行動によって死の不安が和らぎ、他方女子にあっては、慰霊的行動が死の不安を強めている。慰霊という行動には、報恩感謝と思慕を中心とした恩情の念（→オカゲ意識）と、怨霊や死者への畏怖あるいは罪意識を核とした情念（→タタリ意識）の両観念が内包されている。同じ慰霊的行動が男子と女子とで異なった効果をもたらしているのは、男子の慰霊行動はオカゲの念から派生するのに対して、女子のそれはタタリの念とセットになっていることに由来するものと思われる。

分析2 親子の死観の構造

目的

死に対する態度を多次元的に把握するために、まず親子の死観の構造を比較した上で、死観尺度を構成し、親子の死観を比較する。次いで、死観とDASとの関連性を検討する。最後に、子どもの死観に及ぼす親の影響を検討する。

分析方法

Spilka たち (1977) の死観尺度は43個の項目より構成されている。大学生に対しては43項目すべてに回答を求めたが、親については質問票の量を勘案して、大学生のデータに因子分析による予備的項目分析を行った後、このうちの36項目を精選して回答を求めた。親子の死観を比較するという目的のために、両群で分析対象としたのはこれら36項目である。

まず、完全回答のあった大学生群312名、両親群369名それぞれ別個に分析1と同様の方法を用いて主因子法による直交解を求め、固有値1.0以上および固有値が大きく下がる手前の因子まで、という2つの基準のもとに因子数を決定し、次いでそれぞれの因子行列にバリマックス回転を施した。

上記の方法で求めた両群の因子構造の類似性を見るために、Wrigley と Neuhaus (1955) による因子の一致係数を求めた。これによって高い近似性が得られたなら、次に両群を込みにして上と同様の方法で因子分析を行い、その結果に基づいて死観尺度を構成するという手順をとった。

表4 大学生とその両親それぞれの死観項目の因子負荷行列(バリマックス回転)

項 目	大 学 生 (N=312)						両 親 (N=369)					
	因子I	因子II	因子III	因子IV	因子V	因子VI	因子I	因子II	因子III	因子IV	因子V	因子VI
#1 誰かが死んだからといって、世界が変わるわけではない。	-.096	.062	.005	.008	-.060	.420	-.079	.254	-.112	.094	.042	.357
#3 死ぬことを想像することはできない。	.060	-.037	-.161	.041	.310	.186	.083	.046	.089	.073	-.103	.342
#4 死とはもっともつらいものである。	.110	.021	-.117	.586	.204	.062	.014	.132	.683	.104	.090	-.061
#5 死んでもまたこの世に生まれて楽しい生活が送れる。	.729	-.072	.192	-.030	-.001	-.010	.686	-.190	.020	-.041	.088	-.059
#6 人は死んでも極楽(天国)へ行き、幸せに暮らすことができる。	.788	-.157	.107	.068	.089	-.085	.749	-.018	.126	-.056	.052	-.010
#7 死んでしまえば、もう人生の意義を追求できなくなる。	-.333	.713	-.063	.069	.081	.069	-.198	.588	.055	-.014	-.021	.115
#8 死はその人の人生観が試されることである。	.113	-.011	.730	-.065	.002	-.128	.063	.122	.121	-.013	.576	-.050
#9 死んでしまえば、自分の力を十分に生かすことができなくなる。	-.248	.682	-.008	.007	.173	-.002	-.187	.612	.022	.123	.020	.008
#10 死は恐れるものでも歓迎するものでもない。	.032	.073	.095	-.430	.136	.122	-.094	.351	-.225	.095	.092	.204
#11 今死んでしまうのは後ろめたい気がする。	.037	.147	-.049	-.113	-.004	-.062	.016	.234	.193	.142	.268	-.038
#12 社会全体からみれば人の死など取るに足りないことである。	-.091	-.045	.015	.065	-.004	.622	.108	-.031	.008	.089	.157	.579
#14 死とはその人を試す人生最後のテストである。	.112	-.072	.670	.128	-.079	.092	.134	-.076	.079	.050	.683	.097
#15 死とは何にもまして予測しがたいものである。	.085	.177	-.098	.144	.607	-.075	.029	.174	.240	.482	.111	.060
#16 死ぬことは愛する人達を見捨てることになる。	.205	.345	.047	.302	-.038	.022	.043	.433	.189	.038	.135	.063
#17 今死ねば、あらゆる可能性を試さないままに終わってしまう。	-.272	.692	-.007	.158	.191	-.004	-.148	.709	.165	.140	.045	-.023
#18 死とは最後の不幸なできごとである。	-.039	.274	.010	.758	.107	.100	.005	.186	.744	.272	.105	-.038
#20 死ぬとまた別の世に生れ変わって、よりよい人生を送ることができる。	.798	-.096	.198	.030	-.001	-.055	.799	-.204	.026	-.091	.092	.005
#21 死んでしまえば一人ぼっちである。	.169	.127	.092	.410	.130	-.022	.191	.074	.488	.056	.096	.195
#22 死は人にとって大切な決定的瞬間である。	.134	-.086	.776	.120	.005	-.024	.086	.124	.252	.023	.619	-.017
#24 死んでしまえば、人は忘れ去られてしまうものである。	-.054	-.064	.020	.036	.026	.605	.003	.046	.094	-.050	.102	.504
#25 死は生命の自然な姿である。	-.301	.020	.099	-.132	.055	.069	-.164	.353	-.307	.247	.092	.140
#26 死ぬことはとても寂しいことである。	-.061	.195	.010	.478	.208	-.044	-.030	.344	.320	.365	.123	.124
#28 死とは未知のことからである。	-.013	.127	.084	.127	.615	-.055	-.077	.134	.032	.672	.161	.104
#29 今死ねば、家族に十分なことをしてやらずに死ぬことになる。	-.017	.307	.023	.048	.156	-.213	-.020	.455	.073	.344	.077	.015
#30 死とは最後の苦しい瞬間である。	.029	.196	.137	.804	.028	.123	-.039	.281	.666	.232	.180	.050
#31 死については誰もが「わからない」という。	-.010	.122	.001	.017	.757	.072	-.048	.211	.116	.698	-.103	.092
#32 死んでしまえば、もう希望を実現することができない。	-.254	.669	-.003	.244	.155	.109	-.108	.602	.271	.208	.032	.105
#33 死ぬ時になって人は完成するものだ。	.170	-.048	.552	-.131	-.039	-.013	.189	-.062	-.046	.014	.498	.104
#34 死ぬと人は清められて生まれ変わることができる。	.754	-.094	.306	.006	-.033	-.035	.666	-.146	.052	-.053	.268	.045
#35 死は複雑な人生のなかでも、もっともわかりにくいものである。	-.042	.194	.055	.032	.812	-.022	-.011	.121	.126	.670	.032	.102
#36 今死ねば、残された家族を世の中の試練にさらさねばならない。	-.092	.644	-.093	.109	.113	.062	-.020	.544	.206	.203	-.001	.126
#37 死とは人生の流れの一部である。	-.003	-.037	.207	-.169	.045	.195	.116	.015	-.139	.033	.243	.313
#38 人生の計画をたてるにあたって死はたいして重要ではない。	.042	.159	-.163	-.131	.191	.359	-.066	.172	-.012	.158	-.110	.518
#39 死とは仏(神)との結合であり永遠の幸福である。	.778	-.169	.112	.005	.071	-.036	.798	-.085	-.001	-.021	.110	.074
#40 死んで初めてその人の人生の価値がわかる。	.114	.051	.542	-.009	.017	.008	.123	.178	.013	.141	.500	.057
#41 死ぬと人はもっとも満ち足りたところへ行くことができる。	.714	-.217	.103	.018	.056	-.059	.629	-.027	-.011	.088	.133	.144
因子寄与	4.094	3.003	2.582	2.521	2.414	1.309	3.464	3.219	2.417	2.323	2.162	1.460

(549)

大学生とその両親の死の不安と死観

— 13 —

結果

主因子解による固有値は、大学生群では $\lambda_1=5.73$, $\lambda_2=3.88$, $\lambda_3=2.05$, $\lambda_4=1.87$, $\lambda_5=1.32$, $\lambda_6=1.06$, $\lambda_7=0.77$, $\lambda_8=0.59$, $\lambda_9=0.47$, ……、
 両親では $\lambda_1=5.63$, $\lambda_2=4.18$, $\lambda_3=1.77$, $\lambda_4=1.42$, $\lambda_5=1.11$, $\lambda_6=0.93$, $\lambda_7=0.77$, $\lambda_8=0.56$, $\lambda_9=0.50$, ……となり、両群とも6因子と決定した。それぞれの主因子にバリマックス回転を施した結果を表4に示した。

表4に基づいて、因子の一致係数を求めた結果が表5である。大学生群と両親群の間に、それぞれ因子Iと因子I、因子IIと因子II、因子IIIと因子V、因子IVと因子III、因子Vと因子IV、因子VIと因子VIできわめて高い一致係数が得られ、両群の因子構造は非常に近似しており、死についての態度構造は同じであるとみなすことができる。

表5 大学生とその両親の因子の一致係数

大学生	両親					
	因子I	因子II	因子III	因子IV	因子V	因子VI
因子I	.971*	-.339	.108	-.106	.306	.010
因子II	-.335	.912*	.397	.460	.027	.160
因子III	.373	.019	.118	.060	.926*	.070
因子IV	.039	.355	.938*	.367	.211	.023
因子V	-.011	.426	.339	.905*	.059	.304
因子VI	-.096	.160	.033	.083	.060	.850*

(注) * はそれぞれの行における最大の一致係数を表わす。

そこで、親子のデータを込みにして再度36項目の回答に対して、主因子法による因子分析とバリマックス回転を施し、すべての因子にわたって負荷量の低い項目や共通性の低い項目を省いて、項目分析を繰り返したのち、死観を構成する因子を抽出した。最終的に31項目が精選され(除外項目は#3, #10, #11, #25, #37の5項目)、6つの因子が抽出された。表6は各因子において負荷量の高い項目どうしをまとめたものである。複数の因子に高い負荷をもつ項目はまったく見られず、きわめて明快な単純構造が得られた。

因子Iは、「死ぬとまた別の世に生まれ変わって、よりよい人生を送ることができる」、「死とは仏(神)との結合であり永遠の幸福である」、「人は死んでも極楽(天国)へ行き、幸せに暮らすことができる」、「死ぬと人は清められて生まれ変わることができる」など、来世や輪廻転生を信じる項目群より構成され、「浄福な来世」を表わす因子である。

表6 大学生とその両親の死観項目の因子負荷行列 (バリマックス回転 N=694)

項目	因子I	因子II	因子III	因子IV	因子V	因子VI	共通性	平均値 ^a	標準偏差
#20 死ぬとまた別の世に生まれ変わって、よりよい人生を送ることができる。	.798	-.151	.006	.084	-.035	-.080	.674	2.48	1.220
#39 死とは仏(神)との結合であり永遠の幸福である。	.796	-.109	.004	.114	-.013	.052	.662	2.59	1.260
#6 人は死んでも極楽(天国)へ行き、幸せに暮らすことができる。	.761	-.066	.102	.094	-.024	-.022	.603	2.96	1.360
#34 死ぬと人は清められて生まれ変わることができる。	.708	-.132	.032	.255	-.028	-.038	.588	2.60	1.370
#5 死んでもまたこの世に生まれて楽しい生活が送れる。	.696	-.146	-.015	.076	.008	-.166	.539	2.61	1.303
#41 死ぬと人はもっとも満ち足りたところへ行くことができる。	.647	-.088	.033	.153	.023	.128	.469	2.86	1.353
#17 今死ねば、あらゆる可能性を試さないままに終わってしまう。	-.191	.706	.158	.013	.169	-.002	.589	4.91	1.141
#32 死んでしまえば、もう希望を実現することができない。	-.175	.647	.244	.046	.184	.133	.563	4.87	1.266
#7 死んでしまえば、もう人生の意義を追求できなくなる。	-.257	.626	.096	-.044	.022	.097	.479	4.78	1.187
#9 死んでしまえば、自分の力を十分に生かすことができなくなる。	-.211	.623	.045	.005	.140	-.005	.454	4.85	1.179
#36 今死ねば、残された家族を世の中の試練にさらさねばならない。	-.055	.589	.159	-.009	.197	.141	.434	4.53	1.275
#16 死ぬことは愛する人達を見捨てることになる。	.110	.376	.204	.112	.038	.102	.219	3.79	1.499
#29 今死ねば、家族に十分なことをしてやらずに死ぬことになる。	-.032	.373	.097	.052	.273	-.054	.229	5.07	1.042
#18 死とは最後の不幸なできごとである。	-.027	.204	.787	.037	.154	-.021	.688	4.05	1.428
#30 死とは最後の苦しい瞬間である。	-.027	.222	.767	.164	.095	.084	.681	3.99	1.415
#4 死とはもっともつらいものである。	.035	.084	.652	.029	.084	.006	.441	3.50	1.376
#26 死ぬことはとても寂しいことである。	-.046	.255	.454	.059	.251	.073	.345	4.73	1.140
#21 死んでしまえば一人ぼっちである。	.191	.101	.416	.079	.111	.065	.242	3.45	1.532
#22 死は人にとって大切な決定的瞬間である。	.106	.058	.184	.717	.024	-.003	.563	3.36	1.498
#14 死とはその人を試す人生最後のテストである。	.124	-.068	.104	.684	-.011	.121	.514	3.15	1.439
#8 死はその人の人生観が試される時である。	.091	.073	.056	.649	.008	-.085	.444	3.76	1.405
#40 死んではじめてその人の人生の価値がわかる。	.109	.105	.056	.538	.067	.154	.344	3.94	1.386
#33 死ぬ時になって人は完成するものだ。	.196	-.048	-.070	.526	-.012	.110	.335	3.05	1.414
#35 死は複雑な人生のなかでも、もっともわかりにくいものである。	-.008	.158	.096	.014	.742	.054	.587	5.05	1.299
#31 死については誰もが「わからない」という。	-.033	.163	.108	-.038	.704	.095	.546	5.13	1.160
#28 死とは未知のことがらである。	-.037	.121	.114	.093	.645	.028	.455	5.14	1.107
#15 死とは何にもまして予測しがたいものである。	.054	.179	.205	-.020	.539	-.026	.368	4.57	1.397
#12 社会全体からみれば人の死など取るに足りないことである。	.045	-.035	.065	.115	.023	.632	.421	3.25	1.525
#24 死んでしまえば、人は忘れ去られてしまうものである。	.001	-.001	.074	.077	-.021	.543	.307	3.02	1.385
#1 誰かが死んだからといって、世界が変わるわけではない。	-.085	.118	.018	.080	-.013	.450	.231	4.51	1.221
#38 人生の計画をたてるにあたって死はたいして重要ではない。	-.021	.155	-.035	-.072	.151	.421	.231	4.19	1.419
因子寄与	3.590	2.745	2.341	2.193	2.098	1.278	14.245		

(注)^a 6件法(1=まったく反対 2=まったく賛成)
 ボールド体は絶対値が.350以上の負荷量を表わす。

因子Ⅱは、「今死ねば、あらゆる可能性を試さないままに終わってしまう」、「死んでしまえば、もう希望を実現することができない」、「死んでしまえば、もう人生の意義を追求できなくなる」、「死んでしまえば、自分の力を十分に生かすことができなくなる」など、人生における挫折を意味する項目、さらに、「今死ねば、残された家族を世の中の試練にさらさねばならない」、「死ぬことは愛する人達を見捨てることになる」、「今死ねば、家族に十分なことをしてやらずに死ぬことになる」など、残された家族に対する心配や別離の念から成っている。この因子は「挫折と別離」を表わす因子である。

因子Ⅲに負荷量の高い項目は、「死とは最後の不幸なできごとである」、「死とは最後の苦しい瞬間である」、「死とはもっともつらいものである」など、死の苦しみを表わす項目と、「死ぬことはとても寂しいことである」、「死んでしまえば一人ぼっちである」など、死の孤独を表わす項目である。「苦しみと孤独」の因子と考えられる。

因子Ⅳは、「死は人にとって大切な決定的瞬間である」、「死とはその人を試す人生最後のテストである」、「死はその人の人生観が試される時である」など、死は人生における大切な出来事であり、死と向き合うべきだと考える項目から構成され、「人生の試練」を表わす因子である。

因子Ⅴは、「死は複雑な人生のなかでも、もっともわかりにくいものである」、「死については誰もが“わからない”という」、「死とは未知のことからである」、「死とは何にもまして予測しがたいものである」など、死を不可解で予測できないものとする項目から成っている。因子Ⅴは「未知」なるものとしての死である。

因子Ⅵは、「社会全体からみれば人の死など取るに足りないことである」、「死んでしまえば、人は忘れ去られてしまうものである」、「誰かが死んだからといって、世界が変わるわけではない」、「人生の計画をたてるにあたって死はたいして重要ではない」など、死を重大な出来事と考えず、むしろ死の問題から逃避したり無関心を示す項目から構成されている。Spilka たち(1977)はこれを「無関心」の因子と名づけたが、これら諸項目を子細に検討すれば、単なる回避や無関心ではなく、そこには無常感やニヒリズムといった態度が潜在していると考えられるべきである。それゆえ、ここでは「虚無」としての死観と解釈したい。この解釈の妥当性については、のちに詳述する。

6つの因子それぞれについて、高く負荷する項目(表6のボールド体で負荷量を示した項目)の評定値を加算した値を項目数で割った値を尺度の得点

とした。大学生男女と両親の得点、および各尺度の信頼性係数を示したのが表7である。死観に関する全般的特徴として、「未知」および「挫折と別離」がもっとも強く、次いで「苦しみと孤独」、「虚無」の順であり、「浄福な来世」や「人生の試練」といった肯定的死観は相対的に稀薄である。

表7 大学生とその両親の死観尺度得点および尺度の信頼性係数

	浄福な来世	挫折と別離	苦しみと孤独	人生の試練	未 知	虚 無
全体平均値	2.68 ^a	4.69	3.96	3.46	4.98	3.74
SD	1.03	0.83	1.01	1.00	0.97	0.89
N	692	701	696	696	700	694
男子平均値	2.58	4.68	3.88	3.11	5.04	3.44
SD	1.04	0.77	0.91	1.02	0.94	0.91
N	228	228	228	228	228	228
女子平均値	2.93	4.52	3.76	3.24	5.10	3.29
SD	0.84	0.82	0.92	0.85	0.96	0.83
N	82	82	82	82	82	82
父親平均値	2.46	4.77	3.99	3.68	4.92	4.10
SD	1.10	0.92	1.15	1.08	1.01	0.91
N	188	191	188	190	189	186
母親平均値	2.88	4.70	4.11	3.73	4.91	3.94
SD	1.00	0.81	1.03	0.96	0.98	0.88
N	194	200	198	196	201	198
信頼性係数 α	0.88	0.80	0.79	0.77	0.78	0.60

^a 6件法 (1 = まったく反対、6 = まったく賛成)

性別と親子のちがいを検討するために、この2つを要因とした分散分析をそれぞれの尺度について施した。その結果、有意な性差が「浄福な来世」($F=21.52$, $df=1/688$, $p<.0001$)と「人生の試練」($F=7.63$, $df=1/692$, $p<.01$)に見られた。また、親子の差が「苦しみと孤独」($F=5.89$, $df=1/692$, $p<.05$), 「人生の試練」($F=46.44$, $df=1/692$, $p<.0001$), および「虚無」($F=86.33$, $df=1/690$, $p<.0001$)に見いだされた。

これらの結果を要約すると、女性は死を人生における重要な出来事と受け止め、またその濃厚な靈魂観念³⁾からいって、来世に対する信仰が相対的に

3) 女子の靈魂観念は4群の中でもっとも強く、それは母親の影響を強く受けている(金児, 1991)。

強い。世代差に関しては、親は子どもよりも死を苦痛で孤独なものであるが、それは人生の試練と考えている。しかしその一方で、子世代よりも死を重く考えず、死の問題からの逃避、あるいは逆説的にいえば生の否定といったこともみられる。否応なく死を意識せざるをえない年齢であるがゆえに、死への態度も複雑である。

分析1で明らかにされたように、死の不安に関しては、親世代よりも子世代の方が、男性よりも女性の方が強かった。しかし、興味深いことに、「苦しみと孤独」としての死観は親世代の方が濃厚である。このことを詳細に検討するために、「苦しみと孤独」尺度を構成する5つの項目ごとに、4群を要因とした1要因の分散分析を行った。その結果、#26と#21の「孤独」を表わす項目には差が見られなかったが、「死とは最後の不幸な出来事である」(#18)、「死とは最後の苦しい瞬間である」(#30)、および「死とはもっともつらいものである」(#4)の3項目に有意な差が認められた(それぞれ $F=3.18, df=3/696, p<.05$; $F=6.28, df=3/699, p<.001$; $F=4.69, df=3/699, p<.01$)。多重比較(Tukey法)の結果、#18と#4においては、母親と女子、母親と男子の間の差が5%水準で有意となった。つまり、母親は子どもよりも死を「苦しみ」と受け止めているということである。DASに表わされている死の不安は、どちらかといえば死の肉体的苦痛に関わる情動反応であるのに対して、「苦しみと孤独」は、認知レベルでの死の精神的苦痛を指している。

以上6つの死観が死の不安とどういう関係にあるかを見るために、死観とDASとの相関係数を求めた。この結果を表8に示した。全体で見ると、「人生の試練」を除く5つの死観との相関が有意であり、このうち「虚無」のみ

表8 死観とDASの相関係数

	全体 (N=692)	男子 (N=228)	女子 (N=82)	父親 (N=180)	母親 (N=188)
浄福な来世	.12**	.18**	.25*	.09	.01
挫折と別離	.24***	.24***	.21	.28***	.31***
苦しみと孤独	.48***	.46***	.58***	.53***	.50***
人生の試練	.04	.06	.13	.12	.01
未知	.30***	.30***	.47***	.20**	.35***
虚無	-.19***	-.13*	-.29*	-.15*	-.10

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

が死の不安とマイナスの相関関係にあった。もっとも大きなプラスの相関係数は「苦しみと孤独」であるが、DAS 自体が死に対する不安を測定しているということから当然であろう。総じて、死の不安が高い人は、死によって苦しみと孤独を味わわなければならない、死は不可解で予測できないものだ、死は人生の挫折で、愛する人たちを見捨てることになる、死んでも来世で幸せに暮らせる、と考える人である。それに対して、死の不安が低い人は、死の問題から逃避したり、あるいは人間の存在や生の意味を否定したりする人である。

以上に述べた結果を裏づけるために、DAS と死観尺度の主成分分析を行い、これをバリマックス回転した結果を表9に示した。主成分Ⅰには、「苦しみと孤独」、「挫折と別離」、「未知」といった否定的死観の負荷量が高く、DAS はこれらの死観とともに主成分Ⅰの構成に寄与している。主成分Ⅱはこれとは逆に、「浄福な来世」と「人生の試練」という肯定的死観に負荷量が高い。そして、注目すべきことに、「虚無」はDAS（マイナスの負荷！）とともに主成分Ⅲを構成している。

表9 DASと死観尺度の主成分分析（バリマックス回転）

尺度	主成分Ⅰ	主成分Ⅱ	主成分Ⅲ	共通性
苦しみと孤独	.786	.209	-.030	.662
挫折と別離	.731	-.254	.264	.670
未知	.694	-.046	.071	.489
D A S	.661	.170	-.539	.757
浄福な来世	-.111	.832	-.189	.740
人生の試練	.147	.736	.303	.655
虚無	.127	.081	.855	.754
固有値	2.121	1.380	1.225	4.730

最後に、子どもの死観に及ぼす親の影響を見るために、36個の死観尺度項目それぞれについて、子どもの性別に関係なく、父親・母親・子どもの三者間相関係数（ピアソンの積率相関）を算出した。さらに、子どもの性別を分けて、同じく三者間相関係数を算出した。表10は全項目の親子間相関係数である。全体として、親子間の有意な相関は、父親と子どもでは2項目、母親と子どもでは1項目にすぎない。これに対して、夫婦間では実に32項目にわたって有意な相関があった。子どもの性別を分けた場合も、男子では父親との間に1項目、女子では父親との間に3項目（このうち2項目はマイナスの

表10 死観全項目の親子間相関係数

項目	全 体			男子学生			女子学生		
	父子	母子	父母	父子	母子	父母	父子	母子	父母
#1 誰かが死んだからといって、世界が変わるわけではない。	-.10	.05	.25**	-.07	.02	.28**	-.18	.21	.07
#3 死ぬことを想像することはできない。	.04	.11	.37***	.09	.15	.40***	-.10	.01	.30*
#4 死とはもっともつらいものである。	-.11	-.04	.22**	-.09	-.08	.19*	-.17	.02	.28
#5 死んでもまたこの世に生まれて楽しい生活が送れる。	.09	.16*	.31***	.13	.17	.30***	-.03	.21	.35*
#6 人は死んでも極楽(天国)へ行き幸せに暮らすことができる。	.11	.09	.26***	.10	.07	.23**	.11	.23	.35*
#7 死んでしまえばもう人生の意義を追求できなくなる。	-.13	.06	.20*	-.13	.10	.29**	-.08	.00	-.12
#8 死はその人の人生観が試されるときである。	-.08	.09	.38***	-.06	.08	.41***	-.13	.10	.29
#9 死んでしまえば自分の力を十分に生かすことができなくなる。	.09	-.06	.02	.06	-.04	.04	.24	-.10	-.14
#10 死は恐れるものでも歓迎するものでもない。	-.06	-.03	.21**	-.05	-.03	.22*	-.07	-.04	.19
#11 今死んでしまうのは後ろめたい気がする。	.03	.10	.17*	-.01	.09	.09	.14	.11	.30*
#12 社会全体からみれば人の死など取るに足りないことである。	-.02	.06	.17*	.03	-.04	.25**	-.16	.35*	-.01
#14 死とはその人を試す人生最後のテストである。	.05	.10	.33***	.05	.10	.35***	.07	.13	.28
#15 死とは何にもまして予測しがたいものである。	-.01	-.04	.21**	-.03	-.10	.16	.05	.09	.35*
#16 死ぬことは愛する人達を見捨てることになる。	.01	.06	.26***	.13	.14	.32***	-.31*	-.21	.11
#17 今死ねばあらゆる可能性を試さないままに終わってしまう。	.12	-.07	.18*	.14	.00	.16	.07	-.19	.25
#18 死とは最後の不幸なできごとである。	-.08	.00	.40***	-.02	.04	.39***	-.29	-.11	.42**
#20 死ぬとまた別の世に生まれ変わってよりよい人生を送ることができる。	.02	.14	.15	.06	.09	.14	-.10	.29	.16
#21 死んでしまえば一人ぼっちである。	.20**	.11	.30***	.25	.12	.27**	.06	.06	.39**
#22 死は人にとって大切な決定的瞬間である。	.10	.14	.34***	.06	.16	.38***	.26	.07	.21
#24 死んでしまえば人は忘れ去られてしまうものである。	.05	-.00	.19*	.12	-.03	.22*	-.12	.05	.10
#25 死は生命の自然な姿である。	.10	.07	.27***	.15	.09	.33***	-.11	-.00	-.06
#26 死ぬことはとても寂しいことである。	-.08	-.07	.50***	.04	-.08	.49***	-.41**	-.03	.54***
#28 死とは未知のことがらである。	-.09	-.06	.35***	-.10	-.11	.46***	-.04	.07	-.12
#29 今死ねば、家族に十分なことをしてやらずに死ぬことになる。	.12	-.04	.25***	.17	-.10	.14	-.01	.10	.52***
#30 死とは最後の苦しい瞬間である。	-.02	.05	.36***	-.01	.09	.35***	-.07	-.02	.43**
#31 死については誰もが「わからない」という。	-.00	-.01	.19*	-.05	-.06	.25**	.17	.12	-.05
#32 死んでしまえばもう希望を実現することができない。	-.01	-.03	.30***	.08	.05	.24**	-.16	-.17	.43**
#33 死ぬ時になって人は完成するものだ。	-.04	.05	.13	-.05	-.02	.21*	-.00	.22	-.05
#34 死ぬと人は清められて生まれ変わることができる。	.09	.14	.31***	.09	.18	.26**	.13	.15	.41**
#35 死は複雑な人生のなかでも、もっともわかりにくいものである。	.17*	.02	.31***	.30**	.10	.39***	-.11	-.10	-.07
#36 今死ねば、残された家族を世の中の試練にさらさねばならない。	.06	.06	.35***	.06	.10	.49***	.10	-.01	.07
#37 死とは人生の流れの一部である。	.08	.05	.33***	.06	.09	.30***	.13	-.09	.37*
#38 人生の計画をたてるにあたって死はたいして重要ではない。	.06	-.02	.23**	.05	.09	.23*	.07	-.27	.24
#39 死とは仏(神)との結合であり永遠の幸福である。	.05	-.05	.13	.04	-.01	.12	.09	-.05	.17
#40 死んで初めてその人の人生の価値がわかる。	.01	.04	.23**	.02	.16	.25**	-.03	-.21	.23
#41 死ぬと人はもっとも満ち足りたところへ行くことができる。	.11	.01	.16*	.03	-.00	.20*	.32*	.16	.13
相関係数の平均値	.03	.03	.26	.05	.04	.27	-.02	.03	.20

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

(注) 父母の回答のなかのいくつかには完全回答が得られなかったため、相関係数算出にあたっての対の数には項目によって変動がある。全体についてはN=187~204, 男子学生はN=139~150, 女子学生はN=47~52である。

相関), 母親との間に1項目の有意な相関が見られただけである。これらのことは、親の死観が子どもにまったく伝えられていないことを端的に物語っている。

表11は6つの死観について上記と同様の分析を施した結果である。この結果を見ると、父親と母親の間にはすべての死観に有意なプラスの相関があり、相互の社会的影響過程がこれまでの夫婦生活をつうじて存在してきたことがわかる。けれども、親子間にはほとんど有意な相関はなく、かろうじて「浄福な来世」観において、父子間に5%水準で有意な相関が見られた。この死観は、子どもの性別ごとにみても男女とも父親との相関が10%水準で有意であり、また女子においては母親とも相関があった。さらに、女子では、「苦しみと孤独」において父親との間にマイナスの有意な相関が得られた。

表11 死観尺度の親子間相関係数

	全体			男子			女子		
	父子	母子	父母	父子	母子	父母	父子	母子	父母
浄福な来世	.16*	.11	.23**	.14†	.10	.21*	.27†	.25†	.35*
挫折と別離	.06	.05	.25***	.11	.02	.29***	.00	.15	.13
苦しみと孤独	-.06	.04	.35***	.03	.02	.32***	-.32*	.07	.40**
人生の試練	.06	.08	.29***	.08	.13	.34***	-.07	.02	.24†
未知	-.01	-.00	.23**	.04	-.04	.31***	-.10	.09	-.05
虚無	-.00	.07	.20***	.01	.04	.28**	.02	.15	.02

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

(注) 相関係数算出にあたっての対の数値は尺度によって変動がある。全体については $N=187\sim 204$, 男子学生は $N=139\sim 150$, 女子学生は $N=47\sim 52$ である。

考察

6つの因子は、Spilka たち (1977) の 8 因子と非常に類似している。彼らの「家族との別離」と「挫折」が、ここでは「挫折と別離」という1つの因子にまとまっており、また彼らのいう「勇気」としての死、および「無関心」が、ここではそれぞれ「人生の試練」、「虚無」と名づけられている。そして、彼らの「自然な終焉」は、本研究では項目分析によって削除された。このように洋の東西を問わず、死に対する態度構造が一致していることは、死への態度に通文化的な普遍性があることを示唆している。

これら6つの死観を肯定的死観と否定的死観とに大別したとき、誰しも死を否定的に受け止めるのは当然であろう。浄土教のひとつ、浄土真宗の開祖親鸞ですら、弟子唯円の「念仏申し候へども、踊躍^{ゆやくかんぎ}歎喜のころおろそかに

候ふこと、またいそぎ浄土へまゐりたきころの候はぬは、いかにと候ふべきことにて候ふやらん」との問いに、「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり。……いまだ生れざる安養浄土あんにようはこいしからず候ふこと、まことによくよく煩惱ごうじょうの興盛こうじょうに候ふにこそ」と答えている(『歎異抄』)。浄土や天国が信じられていた時代にあっても、死に対する肯定的意味づけは、はなはだ難しいことであった。まして、現代という時代にあっては、なおさら成し難いことであり、人びとは否定的死観を強いられている。

そうした状況にあっても、女性は男性に比べて、死に対して真摯に向き合おうとし、死後の世界を想い、来世での再会を期待している。女性があらゆる意味において宗教的なことは、こうした態度と密接に関係しているからであろう。そして、そのような態度を形成するうえで大きな役割を果たしているのが対人関係、わけでも家族におけるそれである。金児(1993)は、現代家族の孤独と死生観を取り上げ、家族の中で父親・男子は母親・女子よりも孤独感が強いのに対して、家族を寄る辺としてそこに安息の場所を見いだしている母親・女子は、孤独感が稀薄で、生きる意味を豊かにもっていること、そして孤独感と生きる意味の喪失は、超家族的な観念が共有されている場合には稀薄であることを報告している。「浄福な来世」や「人生の試練」における女性の高得点は、密接な対人活動が家族をとおしてなされていることによるのであろう。これに対して、生活の営みが家庭の外で、しばしば対人的葛藤を経験する多くの男性にとっては、母親と子どもの連合した家庭にもはや憩の場を見いだし得ず、家族の営みの中で培われるべき、家族を超えた共同体意識をもつことができない。男性のもつ合理的・科学的志向が、なおさらそれを妨げている。

世代差が「苦しみと孤独」と「人生の試練」に見られた。前者については、その詳細な分析によって、死に対する母親の精神的苦痛感の強さによるものであることが明らかにされた。それゆえにこそ、死を「人生の試練」と捉える死観も濃厚なのである。女性が男性に比べて、真摯に死を受け止め、死後の世界を想うことも含めて、これらの事実は、母親が家族を中心とした現在の生活にもっとも充実を感じていることを反映するものであろう。

死観と DAS との相関係数から、「人生の試練」を除く 5 つの死観のうち、「苦しみと孤独」、「未知」、「挫折と別離」および「浄福な来世」の 4 つについて、それらが強ければ強いほど、死の不安も強くなっていくという関係が明らかにされた。「苦しみと孤独」、「未知」、「挫折と別離」の 3 つは、死の

否定的側面に関わる死観であるので、これらが死の不安と密接に関連していることは当然とあってよい。しかしながら、死の不安の克服のために多くの宗教が説く死後の世界が、それを信ずることによって不安が低まるどころか、逆に高まると思える結果が得られた。一見矛盾したこの結果をどう解釈すればいいだろうか。それには相関関係の方向を逆転しなければならない。死の不安のゆえに来世を信ずるのであると。しかし、それでも問題は残る。不安が来世を信じさせるとしても、それを信じることによってさらに不安が高まっていくという関係は依然として残り、宗教が死の不安を解決し得ないことになる。この疑問を直接解決するには、相関分析的手法ではなく実験的手法、あるいは篤信者の手記や伝記などを資料とした方法によらねばならないが、差し当たり次のように考えることができる。

権威主義的パーソナリティの研究で知られる Adorno たち (1950) は、宗教に魅かれる人々は権威主義的パーソナリティの持主でもあり、また信心深い人ほど人種的偏見が強いことを主張した。これは、キリスト教が説いてきた教えとは真っ向から対立する結果であったので、彼らの研究が刺激となって、宗教と人種的偏見との関係についての多くの研究を生み出すことになった。しかし、結局のところ、この問題は、実はその信仰の動機づけが内発的か外発的かの問題にはほかならない。権威主義を支えている教条主義 (dogmatism) と外発的宗教との間にプラスの相関関係のあることが指摘されている (Raschke, 1973; Paloutzian, et al., 1978)。死の不安と宗教的信仰も同じ関係にある。前述したように、多くの研究が、信仰の動機づけが外発的な人ほど死の不安が高いことを示しているのである (Meadow, & Kahoe, 1984)。本研究で得られた、子世代における「浄福な来世」と DAS とのプラスの相関は、彼 (彼女) らの来世観が外発的な動機に由来していることによるものと思われる。

DAS とマイナスの相関関係にあったのは、唯一「虚無」としての死観であった。繰り返すが、Spilka たち (1977) はこの因子を「無関心」と名づけたけれども、それには従わずここでは「虚無」と解釈した。「無関心」と解釈した場合、DAS とのマイナスの相関は、死の怖れに対する防衛反応と考えることはできよう。これは子世代においては該当するだろう。しかし、金児 (1994) は、多様なサンプルに共通して、50歳という年齢が宗教的関心の分岐点であることを明らかにしている。もし「無関心」という解釈が妥当であるならば、死を意識せざるを得ない年齢にあって、宗教的関心も深まる中

年の親たちが、この死観の尺度で子世代よりも高得点をとるはずがない。Spilka たち (1977) の解釈は明らかに誤りである。「虚無」と解釈したのは、先にも述べたように、この因子には、これを構成する諸項目を総合して、無常感やニヒリズムといった態度が潜在していると思われたからである。死とは生の否定であり、生を否定するということは生の執着を断ち切ろうとすることを意味する。それによって、死の怖れから脱却することができるのである。これを徹底すれば、ニヒリズムによって死を超克できることになり、一種の宗教的な境地にも等しい。

現代にあっても、宗教的態度は親から子どもへと伝承されている (金児, 1991a)。しかし、本研究が明らかにしたように、死への態度に関しては、親の死観は子どもに伝えられてはいない。この事実は、現代の家族のみならず、現代社会が抱える重要な問題点を示すものである。すでに言い古されてきたことではあるが、「死の隠蔽」の問題がある。宗教的態度において、親子の態度に類似性が高いのは、宗教的儀礼をとおして宗教が語られるからである。そのことによって、家族は家族を超えた共同体意識を共有することも可能であろう (金児, 1993)。しかしながら、これまで死をタブー視してきた現代社会において、死を語ることは家族の中ですらできなくなっている。語るためには「死」が実在していなければならないが、それが実在するための場を現代人は喪失してしまっている。⁴⁾

かろうじて、「浄福な来世」観に親子の相関が見られ、とりわけこの親子間類似性は女子に顕著な傾向であることが明らかにされた。このことは、来世観がとりもなおさず宗教観のひとつであり、儀礼をとおして家族が「死」を実践しているからにはほかならない。

死を「苦しみと孤独」と受けとめる死観は、父親と女子で逆の関係にあることも深刻な問題であろう。なぜなら、ここには父と娘の世代間断絶が示唆されるからである。表10の結果に立ち返ってみると、父親と女子の間に有意なマイナスの相関があった項目は、#16の「死ぬことは愛する人達を見捨てることになる」($r = -.31, p < .05$)、#26の「死ぬことはとても寂しいことである」($r = -.41, p < .01$)の2項目である。有意水準を10%とすると、

4) 本稿の校正中、折しも阪神大震災が起きた。日本中を震撼させたこの大災害は、死の問題を忘れていた現代人にあらためてそれを意識させるに十分な体験であった。とくに、被災者やその周辺の人びとが受けた心的外傷は、死生観に大きな影響を及ぼすにちがいない。この意味で、こころの傷が癒されるための死生観の再構築は、きわめて重要な課題となろう。

#18の「死とは最後の不幸なできごとである」($r = -.29$)も二者の間に逆の関係がある。現代の家族においては、母親と娘は家庭に憩の場を見いだしているけれども、父親はその役割が稀薄化して、孤立感と疎外感にさいなまれている(金児, 1993)。死の精神的苦痛が、来世観やある種の宗教的信仰によって癒される女性と比べると、科学的・合理的思考に馴らされてきた父親は、死を「虚無」とみなして救われるほかにはとるすべがない。

もうひとつ注目しておきたいことがある。表8によれば、父親におけるDASと「虚無」との相関係数は $-.15$ ($p < .05$)であったが、非常に興味深いことに、子どもが男子の場合には $-.08$ ($N=143, n.s.$)であり、子どもが女子の場合に $-.35$ ($N=49, p < .05$)となっている。つまるところ、母と娘からの疎外感——死観における父母間の有意な相関係数は、子どもが女子の場合にはよほど少なくなっている(表11参照)——から、現代の父親は生を否定した「虚無」としての死観を強いられている。まさにニーチェのいった「ニヒリズムによるニヒリズムの超克」という重い課題を背負っているのである。そして、父親の深い孤独感は、息子の生きがいの喪失感とも密接に関連している(金児, 1993)とするならば、現代の青年男子もまた父親と同じ課題に直面しているといわねばならない。

要 約

大学生とその両親を対象として、死に対する不安(TemplerのDAS)と死に対する態度(死観)について検討を加えた。

まず、DASに項目分析を施した後測定された死の不安は、父親・母親・男子・女子の4群の中で、父親がもっとも低いことが見いだされた。また、従来、DASの行動レベルとの関連性に関する研究がなされてこなかったもので、ここでは宗教行動との関係を見た。その結果、自己修養的な宗教行動は死の不安を和らげる働きをしているのに対して、現世利益的な宗教行動は死の不安を強めていることが明らかにされた。内発性と外発性という宗教的志向性からこのことが説明された。

死観については、Spilkaたちの死観尺度を用いた。因子分析の結果、Spilkaたちの因子に近似した6つの因子が抽出され、死に対する態度の普遍性が認められた。この因子分析の結果に基づき、尺度を構成して性別と親子のちがいを調べたところ、有意な性差が「浄福な来世」と「人生の試練」に、また、

親子の差が「苦しみと孤独」, 「人生の試練」および「虚無」に見いだされた。

DASはこれらの死観のうち, 「苦しみと孤独」ともっとも相関が強く, 次いで「未知」, 「挫折と別離」と有意な関係にあった。「浄福な来世」は子どもにおいてDASとプラスの相関があり, 来世を信じることによって死の不安が高まるのではなく, むしろ死の不安が強いがゆえに来世を信じるという見方が提示された。この関係とは逆に, 生を否定する「虚無」としての死観によって死の不安は低まっていたが, それは死の不安に対する防衛反応でもあることが考察された。

最後に, 死観は親から子へと伝えられていない現状について考察がなされ, とくに父親の孤独感と死の問題について言及された。

文 献

- Adorno, T. W., Frenkel-Brunswik, E., Levinson, D. J., & Sanford, R. N. 1950
The authoritarian personality. New York: Harper. 三沢謙一・田中義久
訳 1970 『権威主義的パーソナリティ』 青木書店
- Allport, G. W. 1966 The religious context of prejudice. *Journal for the
Scientific Study of Religion*, 5, 447-457.
- Boyar, J. I. 1964 The construction and partial validation of a scale for the
measurement of the fear of death. *Dissertation Abstracts*, 25, 20-21.
- Crumbaugh, J. C., & Maholick, L. T. 1964 An experimental study in
existentialism: The psychometric approach to Frankl's concept of
noogenic neurosis. *Journal of Clinical Psychology*, 20, 200-207.
- 藤沢 伸・浜田哲郎 1961 Fスケールによる人格の研究I 教育・社会心理学研究,
2, 35-46.
- Kalish, R. A. 1963 An approach to the study of death attitudes. *American
Behavioral Scientist*, 6, 68-70.
- Kalish, R. A., & Johnson, A. I. 1972 Value similarities and differences
in three generations of women. *Journal of Marriage and the Family*,
34, 49-54.
- Kalish, R. A., & Reynolds, D. K. 1976 *Death and ethnicity: A psycho-
cultural study*. Los Angeles: University of Southern California Press.

- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, 30, 302-307.
- 金児和子 1990 死と宗教と医療——看護婦・看護学生・医師・一般学生の意識の構造——大阪女子大学文学研究科修士論文(未公刊)
- 金児和子 1994 高齢者の死の意識 伊吹山太郎監修 『現代の心理学』 有斐閣 pp.220-230.
- 金児曉嗣 1978 宗教組織と信仰の機能(Ⅲ)——僧侶の宗教性に関する因子分析的研究 伝道院紀要, No.20, 1-42.
- 金児曉嗣 1982 宗教組織と信仰の機能(Ⅳ)——浄土真宗門信徒の宗教性に関する因子分析的研究, 人文研究, 34, 658-686.
- 金児曉嗣 1985 『子どもと家庭と学校』 貝塚市教育委員会
- 金児曉嗣 1986 門徒代表の宗教行動と宗教意識 宗勢実態基本調査編『宗勢実態基本調査報告書』 浄土真宗本願寺派企画部 pp.65-86.
- Kaneko, S. 1990 Dimensions of religiosity among believers in Japanese folk religion. *Journal for the Scientific Study of Religion*, 29, 1-18.
- 金児曉嗣 1991a 現代における非合理性の復権と家族の宗教観 教学研究所紀要, 第1号, 1-27.
- 金児曉嗣 1991b 宗教性と死の怖れ 黒岩卓夫編 『宗教学と医療』 弘文堂 pp.175-208.
- 金児曉嗣 1993 現代人の孤独と死生観 社会心理学研究, 8, 159-169.
- 金児曉嗣 1994 日本人の宗教性——その社会心理学的研究—— 学位請求論文(大阪市立大学)
- Hooper, T., & Spilka, B. 1970 Some meanings and correlates of future time and death among college students. *Omega*, 1, 49-56.
- Kastenbaum, R. J., & Aisenberg, R. B. 1972 *The psychology of death*. New York: Springer.
- Kastenbaum, R. J., & Costa, P. T., Jr. 1977 Psychological perspectives on death. *Annual Review of Psychology*, 28, 225-249.
- Kastenbaum, R. J. 1986 *Death, society, and human experience* (3rd ed.). Columbus: Charles E. Merrill Publishing.
- Lester, D. 1966 A scale measuring the fear of death: Its construction and consistency. ADI Auxiliary Publications Project document no. 9449. Washington, D.C.: Library of Congress.

- Lester, D. 1967 Experimental and correlational studies of the fear of death. *Psychological Bulletin*, **67**, 26-36.
- Lonetto, R., & Templer, D.I. 1986 *Death anxiety*. Washington: Hemisphere Publishing.
- McMordie, W. R. 1979 Improving measurement of death anxiety. *Psychological Reports*, **44**, 975-980.
- Minton, B., & Spilka, B. 1976 Perspectives on death in relation to powerlessness and form of personal religion. *Omega*, **7**, 261-268.
- Murphy, G. 1959 Discussion. In H. Feifel (Ed.), *The meaning of death*. New York: McGraw-Hill, pp.317-340. 大原健士郎・勝俣暎史・本間 修訳 1973 討論 「死の意味するもの」 岩崎学術出版社 pp.314-336.
- Paloutzian, R. F., Jackson, S. L., & Crandall, J. E. 1978 Conversion experience, belief system, and personal and ethical attitude. *Journal of Psychology and Theology*, **6**, 266-275.
- Raschke, V. 1973 Dogmatism and religiosity, committed and consensual. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **12**, 339-344.
- Spilka, B., Stout, L., Minton, B., & Sizemore, D. 1977 Death and personal faith: A psychometric investigation. *Journal for the Scientific Study of Religion*, **16**, 169-178.
- Templer, D. I. 1970 The construction and validation of death anxiety scale. *Journal of General Psychology*, **82**, 165-177.
- Templer, D. I., Ruff, C., & Frank, C. 1971 Death anxiety: Age, sex, and parental resemblance in diverse populations. *Developmental Psychology*, **4**, 108.